老年期の女性性に関する一考察

西尾　ゆう子

１．問題

女性性（femininity）とは「一般に女性らしさや女性に望ましい特性，女性的なイメージの総体として捉えられており，個人の知覚・認識・感情・行動などの様々なレベルで表出する（江原ら，1989；神田，1993）」とされるが，同時に，「厳密な定義は困難（瀬戸山，2009）」とも言われている。また，鈴木（2001）は「女性性の受容」を，「一人の人間が，女性としての自己の身体を受容し，社会が女性に期待する役割と自己概念を照合・吟味しながら，自己の生き方を考え，主体的に生きていこうとしている状態」と定義している。

本研究では老年期の女性性をテーマに，一人の人間がその老年期において，女性としての身体を持つ自己をどのように体験し生きているのかを理解しようと試みる。老年期は「妻」・「母」・「嫁」といった様々な社会的役割が終了または変化し，一人の人として，自らの来し方・行く末をもの思う時期とも言える。老年期までに各人が担って来た社会的性役割の実経験が個人の女性性の発達に寄与していることは必然的である。しかし，社会的役割に埋もれない，女性としての身体を持つ自己を各人がどのように捉えているか，また，捉え直しているのかという視点を持つこともまた，人間の心理を「存在そのもの（皆藤，2007）」として捉え，その「個性をもっともたいせつに考え（皆藤，同）」る心理臨床研究においては重要であると思われる。

初潮や妊娠・出産，育児，そして閉経といった女性に特有な身体変化は「自己への関心や深い心理的変化を含んだ危機のとき（武内，2002）」とされている。東山（1990）もまた，「女性のイニシエーションは初潮に始まり閉経で完結する」と述べているが，閉経やそれに伴う心理・身体変化は一時的に生起し「完結」する出来事ではなく，年月をかけて徐々に心身の組み替えが行われていく「老年期への移行期の始まりを告げる転換期（岡本，2002）」と捉える方が適切であろう。さらに，閉経を迎えた女性は，それ以後平均して30年余の時間を生きるのであるが，老年期の女性が経験する心理・身体の「危機」や，老年期の「女性性」に焦点をあてた研究は少なく，高齢社会の我が国においてまさに検討されるべき課題と思われる。

2．加齢による身体の変化と女性性−質問紙と半構造化面接調査より

2.1 目的および方法の検討

本節では，二つの調査について述べる。第一に，老年期を生きる女性の心の在り様を知るひとつの手がかりとして，年齢に対する主観的な体験や捉え方を総合的に把握することを目的と

した質問紙調査「年齢に関する主観的認識」を行った。第二に，加齢による女性らしい身体の特質の変化とその情緒体験について理解を深めることを目的とした半構造化面接調査を行った。

調査協力者は，65～75 歳の社会的活動（公民館でのサークル活動や地域活動等）に定期的に参加している女性 25 名であった（表 1)。平均年齢は 70.64 歳であった。社会的活動に参加している女性は，普段から他者と関わり，かつ，自分なりの興味を持って過ごしていると思われ，調査への参加にも積極的であると考えられた。また，これ迄に体験した心身の変化について内省し，言語化する能力がある程度備わっているとも思われた。そして，人との関わりの中で無事に老年期を過ごしている女性の心理を検討することにより，老年期の女性特有の心理特性を理解することが可能になるとともに，心の病理を抱え，心理的援助を必要とする高齢女性の心理を逆照射的に理解することも可能になることが期待された。

表1　調査協力者の概要

年齢	人数	配偶者		居住形態	
		有	無（死別・独身）	家族と同居	独居
65-70	12	9	2･1	11	1
71-75	13	6	4･3	8	5
計	25	15	6･4	19	6

2.2　質問紙による「年齢に関する主観的認識」の調査方法

まず，調査の説明を行い同意書を交わした。次に，ラポールの形成と暮らしぶりを把握するため，年齢・家族構成・社会的活動について尋ねた。質問項目は，回答者が「外見・からだ・感じ方・興味や関心の有り様・活動の仕方・願望」について「現在自分をどうみているかが表現（平木，2002)」される 7 項目を参考に作成した（表 2)。教示は「文章を読んで括弧に数字を入れて下さい。思ったとおりに自由にお書き下さい」とした。

表2「年齢に関する主観的認識」の質問項目

1.主観的感覚	私は日頃（ ）歳ぐらいに感じる。
2.心理的水準	私の気持ちは（ ）歳ぐらいの人と同じだと思う。
3.新奇への関心	私の興味や関心は（ ）歳ぐらいの人と同じだと思う。
4.主体的願望	私は今（ ）歳だったらいいなと思う。
5.身体イメージ	私のからだは（ ）歳ぐらいの人と同じだと思う。
6.自己表象	私は（ ）歳ぐらいに見えると人から言われる。
7.自己活動イメージ	私の日常の活動は（ ）歳ぐらいの人と同じだと思う。

2.3　質問紙による「年齢に関する主観的認識」調査の結果と検討

25名の回答をもとに，回答最大値と最小値を表3に，回答年齢と実年齢の差を図1に表した。

表3 「年齢に関する主観的認識」25名の結果
回答最大値と最小値

	回答の最大値（歳）	回答の最少値（歳）
1.主観的感覚	75	50
2.心理的水準	72	30
3.新奇への関心	70	5
4.主体的願望	70	15
5.身体イメージ	85	50
6.自己表象	75	50
7.自己活動イメージ	75	50

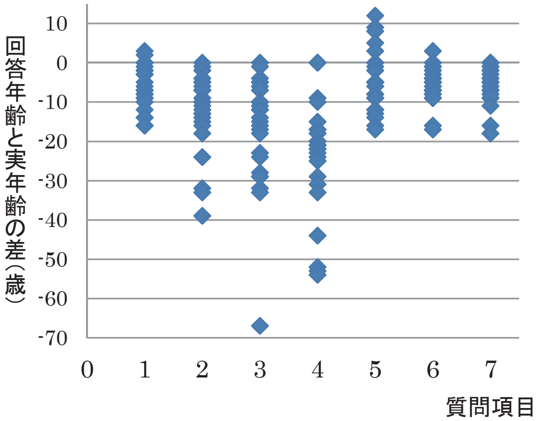

図1 「年齢に関する主観的認識」25名の結果：回答年齢と実年齢の差

平木（2002）によると，実年齢より若いと思っている面と年をとっていると思っている面を比較検討すると，個人の自己の在り様がわかるという。さらに，30歳以上の人は「心理的水準（気持ち）」は実際の年齢よりも若く感じ，また，実際の年齢よりも若いことを望む傾向があるとされている。では，高齢女性の回答にみられる特徴はどのようなものであろうか。

図1からは，各項目で回答年齢の広がりに差は見られるものの，全般的に実年齢より若い年齢を答える傾向が見て取れる。だが，その中で実年齢より高い回答が多く見られるのが「5．身体イメージ」であることが分かる。以下に，項目ごとに詳細な検討を行う。

「1．主観的感覚」では，25名中20名の回答が60−70歳の間に集中し，最も多かった回答は60歳であった（8名）。60歳という年齢は還暦，老年期の入口に立つ年齢といえる。たとえば，実年齢69歳の女性が「この頃やっと60になった気持ちがする」と語るように，主観的には，中年期と老年期の移行期にいるように感じている人が多いと推察される。一方，75歳（最大値）と答えた人は，「身体イメージ」の最大値85歳を答えた人であった。また，50歳（最小値）と答えた人は「身体イメージ」の最小値50歳と答えた人であった。この二人にとっては「身体イメージ」と「主観的感覚」が関連しあっている可能性が推測される。

「2．心理的水準」でもまた，12名が60歳と答えた（そのうち，実年齢65 - 69歳は6名，70 - 75歳は6名であった）。他方，6名が実年齢より大幅に若い年齢を答えた（30歳1名，40歳2名，50歳3名）。その中には，「自分では若いつもり」と，若い頃と変わらない気持ちで過ごしている人もいれば，「老けようと思ったらいくらでも老けられるけど，残り少ない人生楽しく過ごしたい」と，若々しい気持ちを保つよう努力している人もみられた。気持ちの面で半数以上の人が還暦を親和的に感じるということは，裏返せば，中年期から老年期のあわいに心理的にとどまっているとも思われ，老年期への移行し難さが示唆される。60歳を超えた後に年をとるということには，第二の人生を生きるという意味合いもあれば，今生の人生を終えるというテーマも徐々に現れてくると思われ，老年期に実感を持って年を重ねていくことについては，特有の難しさがあるのかもしれない。

「3．新奇への関心」では，24名が実年齢より若い年齢を答えた。回答最小値は5歳であり，その理由は「好奇心ということでは孫達と変わらない（実年齢 72）」と語られた。また，40—50歳とする回答が他の項目に比して多かった（40歳5名，50歳4名，55歳1名）。40歳と答えた人（実年齢69）からは，男性アイドルのコンサートに行き，ワクワクして若返ったような気持ちになったことが語られた。また，50歳と回答した人の中からは「まだまだ働きたいのに，年だけで拒否されるのが辛い（実年齢67）」や，「50歳の娘とやりたいことをやり出すタイミン

グが似ている（実年齢 74)」等の理由が語られ，好奇心や意欲を持って今を生きている気持ちが，50 歳という回答にこめられていると思われた。

「4. 主体的願望」の最大値 70 歳とした人は「色々な苦労があったが，今が一番満足」という 70 歳の女性で，幾多の苦労を乗り越えて辿りついた現状に満足している心持が伺えた。一方，最小値 15 歳とした人は「高校に進学できなかった。出来ることなら 15 歳からやり直したい」という 69 歳の人であった。また，「(振り返って）後悔はないけれど反省する点はいっぱい」だから 45 歳に戻りたいと語る人（実年齢 66）もいて，主体的願望は人生における達成の満足度と影響しているようであった。最多の回答は 50 歳（11 人）で，その理由として「50 歳だったら，人生をやり直せる」ことが共通して語られた。やり直したいことは「外国旅行をしたり，新しい趣味を始めたりして，老後の世界を広げる」や，「今とは全く違う人生を歩む」等，多様であったが，50 歳という年齢は，新しいことを始められる，または，やり直しがきく最後の年齢と感じる人が多いようであった。言い換えれば，65 歳を過ぎると今の自分を受け容れる他なく，新しいことに挑戦して巻き直しをはかることも，失敗を繰り返すことも出来ないという心境がうかがえた。

「5. 身体イメージ」は，他の項目に比較して実年齢より高い年齢を答える人が多かった。たとえば，外見は若く見られても耳が遠くなり年をとって感じるという人や，「心は若いと思うし孫にはお婆ちゃんと呼ばせない。でもやっぱり体はね…」という人，骨年齢を気にする人，また，容貌が衰えて寂しいと語る人等であった。このように，身体内部の変化に重きをおくか，外見の変化に重きをおくかはそれぞれだが，身体の変化・不全が「身体イメージ」に強く働きかけ，それによって加齢の現実が意識されると思われた。

「6. 自己表象」は，実年齢よりも 5 - 6 年若く見られると 17 名が回答した。また，15 年以上若く見られると 2 名が回答した。実年齢（67）より 17 年若く見られると回答した女性は，周りの人からは 50 代と思われていて，実年齢を言うとびっくりされるということであった。

調査者の印象でも，全体の傾向として若々しく見える人が多いと思われたが，その理由のひとつとして，調査対象者が定期的に何らかの社会的活動に参加しているということがあげられる。他者という対象を通した自己認識は，化粧・服装を通して自分の理想に近づける操作が可能である。他者との関わりを重視し，また，楽しむことが可能であることにより，従来の年齢が喚起するイメージより若々しい外見を持つ人が多かったのかもしれない。

「7. 自己活動イメージ」では，65 歳以上の年齢を 19 名が回答した。本項目は日常活動を問う内容のため，心理的に操作することが難しい。たとえば「気持ちは若いつもりでもこの頃ちょっとサボリが多くなって来たからな…」等というように，現実に即した回答が多くなったと思われる。他方，実年齢より 10 年以上若いと 3 名が回答し，日頃の活動に対して，実年齢が喚起するイメージと大きく離れたイメージを持っている人がいることもうかがえた。

以上，25 名の回答をもとにその特徴や傾向を検討した。「心理的水準」という内的に感じられる気持ちや，「新奇への関心」という外界に向かう好奇心は実年齢から離れた若い年齢を答える人が多かった。このことは，調査対象者が社会的活動に参加していることの影響も大きいと思われる。好奇心を持って社会的活動に取り組むことで，他者と関わる機会も増え，気持ちも若く保たれているという相乗効果が予想できる。そうした人々は，「いくつになっても年をとら

ない」心の領域を生き生きと保ち生活しているとも言えるだろう。

また,「主体的願望」は人生経験（挫折／達成）を反映して個人差が大きくなる傾向にあった。一方,「身体イメージ」では実年齢より高く回答する人が全項目中最も多かった。そして「自己表象」,「自己活動イメージ」は全て 50 歳以上～実年齢に接近した回答が多かった。このように，視覚的な要素や日常活動の諸能力，とりわけ身体内外の変化や不全において，多くの人が老いという現実を実感していることが示された。だが，回答には個人差があり，一般化することには限界があると思われる。次に，3 名の回答を図 2 に示し，各人の感じ方・認識の多様性を示すこととする。

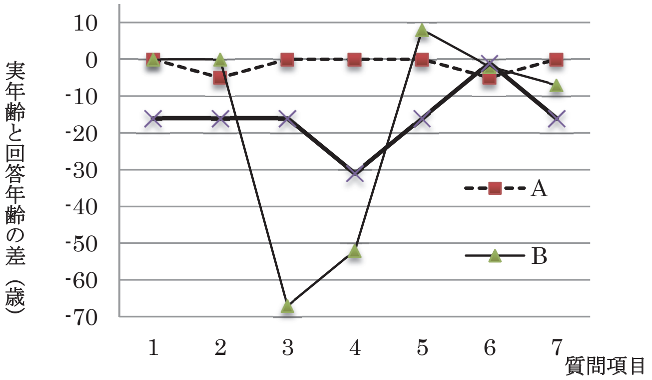

図2　A, B, Cの「年齢に関する主観的認識」の回答結果

まず，A（65 歳）の回答の特徴は実年齢と回答がほぼ同じということである。A によると，昔は「周りに負けてはならじ」という気持ちで子育てや家事に力を注いできたが，63 歳を過ぎた頃から「もうしんどいし，片意地はって頑張らなくなった」という。また，子どもを叱咤激励するのではなく，一歩ひいて見守ることが大事と感じるようになってきたともいう。若い頃はエネルギーもあり，見栄もあり，自他ともに理想を目指して頑張っていたが，年をとるにつれいい意味で力が抜け,「別に今でいい」という心境になっている様子がうかがえた。これまで競争相手と感じられていた周囲の人との関係も，今では「家事にしろ，夫との付き合い方にしろ，そんなやり方もあるんだと皆さんに勉強させてもらっている」と語るように，謙虚なものへと変化していた。A は今，年をとることの良い面を感じていると言えるのかもしれない。

次に，B（72 歳）の特徴は「新奇への関心」が 5 歳,「主体的願望」が 20 歳，そして「身体イメージ」が 80 歳と，大きなばらつきがみられることである。B によると「新奇への関心」については孫の影響が大きいという。孫と話していると「ものすごく賢いな」と感じる時があるという。また，季節の行事毎に保育園に呼ばれてお遊戯に参加すると自然に気持ちが子どもたちと同じ目線になっていくという。一方で,「年寄りと話していると,（自分は）この人よりもっと年をとっている」ように思う時もあるという。そして，もし戻れたら「20 歳に戻れたらいいなあと思うわね」と感慨を込めて語った。さらに，体に関しては 79 歳の夫と「一緒くらいに思う」と語られた。このように，自己の中に幼子のような感覚と老いの意識を併せ持つこと，そして，若かりし 20 歳の頃に郷愁に似た思いを強く感じていることが B の特徴であろう。

最後に，C（66 歳）について述べる。C の回答は 50 歳が大半を占め,「主体的願望」が 35 歳,「自己表象」が 65 歳であった。C は 4 つのカルチャー教室に通い，その上バトミントンもしているため，毎日が「めちゃ忙しく」，自分が 60 代後半とはとても思えないという。そして「主体的願望」が 35 歳というのは,「35 歳だったらバトミントンがもっと強くなれると思うし，もっと違ったふうに子育てをできたと思うから」と語った。一方,「自己表象」については，電車

やバスで席を譲られることもあり，見た目は年相応だと思うと語られた。このように，日頃の自分は50歳と感じ，さらに，心の中では35歳の自分に戻る願いを持っていたとしても，実際は66歳で見た目は年相応というギャップを自然に生きていることがCの特徴といえるだろう。

以上に述べた3名とも，実年齢と気持ち・願望・身体イメージ等のずれをさりげなく抱えてそれぞれの日常を生きる様子が見受けられた。人によって実際の年齢より若いと思っている面と年をとっていると思っている面は異なり，その違いは日頃の人間関係や活動の在り様，また，それまでの人生経験に関わっている。そのため，個人差はより多様になる。心理臨床の場で高齢女性とお会いする時には、たとえ視覚的な要素では年齢を重ねているように見えたとしても、年をとらない心の領域があることを慮り、各人の心の在り様に寄り添う態度が求められるだろう。たとえば、前述した7項目の視点を用いることにより，各人が現在自分をどう見ているのか，どのような思いで暮らしているのかということを多面的かつ立体的に理解する手掛かりが得られると思われる。

ところで，上記の結果では、日常の中で感じられる身体の変化・不全が各人の「身体イメージ」に働きかけ，それによって加齢の現実が意識されることが推測された。以下に示す第二調査では，高齢期を生きる女性がどのような女性特有の身体変化を体験し，また，どのように感じたのかということについてさらに検討する。

2.4 半構造化面接調査の方法

面接は，前述の質問紙調査に続けて行った(90度法)。時間は，約一時間であった。まず，面接の概要と守秘義務について説明を行った。また，答えにくい質問はパスすることができる事を明確に伝えた。次に，「女らしい身体の変化の中で，最近最も印象に残っている体験は何ですか。それを，あなたはどんなふうに感じられましたか。」という質問を行った。調査者は傾聴を心がけ，内容が理解しにくい時には明確化を意図した質問を適宜行った。

2.5 半構造化面接調査の結果と検討

「女性らしい身体の変化の中で最近最も印象に残っている体験」と，その「情緒体験」について，KJ法（川喜田，1967）を用いて分類した。分類は筆者と臨床心理学を専攻する大学院生2名の合議のもとに，対象者にA～Yまでアルファベットでラベルを付け，対象者が語った言葉をできるだけそのまま抽出しキーワードとした。得られたキーワード47個を分類対象とし，カードに記入した。全てのカードを机上に広げ，内容の類似したカード同士を集め，グループを作り，それぞれにタイトルをつけた。次に各グループ間の関係を矢印で図示し，図解化した。最後に，図解を元に全体の関連を検討し，「女性らしい身体の変化の中で，最も印象に残っている体験とその情緒体験」（図３）を作成した。

以下に，図３の検討を行う。まず，「女性らしい身体の変化の中で，最近最も印象に残っている体験」では，Ⅰ．生殖器疾患４名（「子宮筋腫」「乳癌で片胸切除」「膣に（括約筋の老化から）ピンポン球状の腫物」），Ⅱ．身体の変化９名（「容姿の衰え」「歯を失う」「更年期障害」），Ⅲ．閉経８名，Ⅳ．変化なし７名の４カテゴリーが得られた。

次に「情緒体験」では以下の結果が整理された。Ⅰ．生殖器疾患の群では，「その時はショッ

ク（DQU)」と強い衝撃を受けたことが語られた。だが，「子宮全摘後はホルモン治療のお蔭でかえって健康に（N)」「病気になったお蔭で家族に思いやりを持って接することが出来るよう

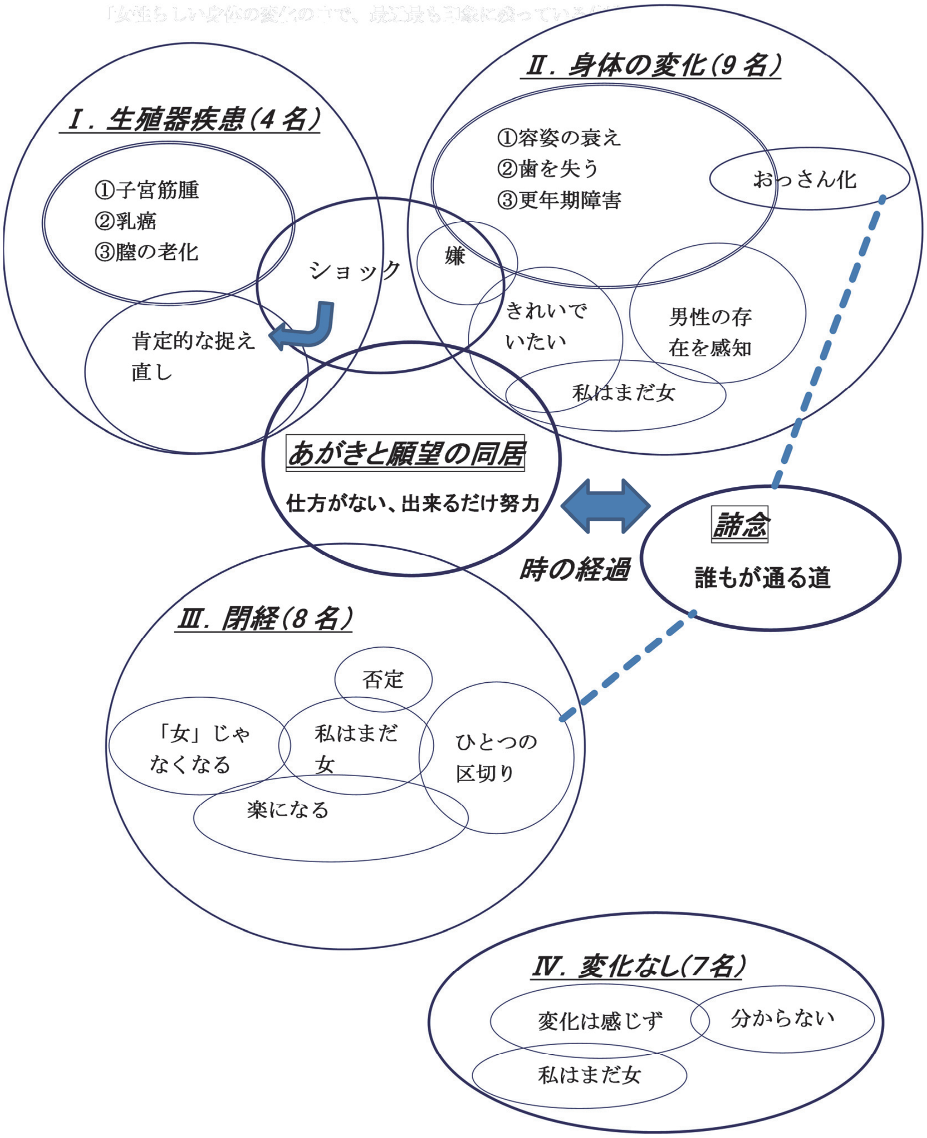

図３「『女性らしい身体の変化の中で，最も印象に残っている体験』とその情緒体験」

に（D)」「もう我慢しないと決めたら明るくなった（Q)」等，肯定的な捉え直しがされていた。

また，Ⅱ．身体の変化の群のうち，容姿の衰えでは「まつ毛が薄くなってきた（A)」ことや，「胸やお尻が下に垂れて（ABJKLOTV)」きたことについて，「年より若く見られたいわけじゃないけど，やっぱりぼろぼろなんは嫌（A)」「嫌だけどこれを直すって言う事は出来ない（K)」，「何とも言えない（V)」等と，複雑な気持ちが語られた。そして，そのような変化を受け，

整形を考えたり（A），高価な補正下着を購入したり（LJ），美容体操に励んだりと（O），様々な努力を行う人もいれば，「胸が垂れてきたけど，面倒だからブラジャーもしない（K）」等，体型の維持に段々気を使わなくなる人もみられた。他方，思いがけず（家族以外の）男性から胸の形を褒められる／触られる体験も語られた（T）。その体験を通して「自分では，胸も垂れておっさん化しているって思うのに，男の人は私のことを，まだ女として見ているんだ（T）」と驚き，自らが「女」であることを再認識したという。それ以後，自分の胸を女として強く意識し，入浴後には胸の形をチェックしたり，化粧や服装，下着にも気を配るようになったりと，生活や振る舞いにも影響が及んだと言う。

次に，Ⅲ．閉経の群のうち，閉経を「ひとつの区切り（FH）」と感じた人は「老人の仲間入り（F）」をする契機と捉えていた。また，「楽になる（DGHKR）」と体験した人の中には，「閉経したからって女性でないとは思わない（G）」と語る人もいれば，「生殖機能が無くなってしまう。半分女で，半分女でないんかな（R）」と寂しさを体験した人もいた。さらに，「自分はまだそんな年ではない（B）」と閉経を否定した人は，10年間ほど「また戻ってくる」と思うようにして，閉経について「忘れてしまい」，何も考えないようにしていたという。

以上のような情緒体験後，最終的にどのように気持ちの折り合いをつけたかという点では，二つのカテゴリーが得られた。第一に，「あがき」と「願望」の同居，つまり，「若くて美しくて健康で輝きたい（L）」というように，自らの身体変化を目の当たりにして，何とか変化を補償しようと抗う心の在り様である。第二に，諦念，すなわち，加齢による身体変化は「女の人が皆通る道（X）」であるから仕方が無いと諦め，「これからは，変化に対処した生き方を（F）」と，自らの気持ちと身体の変化を調和させていこうと努める心の処し方である。

最後に，Ⅳ．変化なしの群には，「特に変化は感じなかった（CIMPS）」という人や，「分からない（WY）」という人が含まれる。前者の群では，閉経について「ストレスで止まったのだろう（C）」と知的な理解は示す人はいるものの，「特に何も感じなかった」と情緒は語られなかった。その中には，今でも男性とのセックスを通して「女としての喜び」を感じ，「私は現役の女」と強く意識している人（S）もいた。後者の群には，「50代も今も変わらない」と語る人（Y）や，「強いて言えば初潮？（W）」とする人もいた。

2.6 考察

本節では，半構造化面接調査の結果で特に重要だと思われた点について考察する。

第一に，これまで、加齢による身体変化について，膣や子宮といった生殖器疾患が挙げられることは稀であった。だが，生殖器疾患を体験した人からは，病名を知った時の落胆と悲しみが情緒的に語られ、「男性を受け容れる」「産み育む」女性としての機能を決定的に失う喪失として体験されていることが示唆された。また，医師から「年のせい」と事務的に対応されたという語りからは､その喪失に伴う感情が正しく理解されなかったことへの腹立ちが感じられた。通常誰もが体験する生殖機能の終了とは異なり、生殖器疾患は触れにくい話題でもあり、情報も少ない。人によっては、自らの女性性の傷つきとして体験される可能性もある。生殖器疾患は、老年期の女性にとって誰にも等しく訪れ得る体験として認識し，かつ，個々の主観的体験に心を寄せることが求められるだろう。しかし，この群における特徴は，失うばかりではなく

新たに得るものもあったことや，周囲の人達の支えに対する感謝という肯定的な捉え直しも同時に語られたことである。生殖器疾患の受け止め方や，その体験をどのように心に収めたかということについての語りは各人で異なっていたが，共通して，高齢に至るまで様々な経験を生き抜いてきた女性の持つしなやかさが感じられるものであった。

第二に, 容姿の衰えに対する情緒体験では,「嫌」と感じ, 美しさを保つための努力に励む人々と，体型の変化は「仕方がないこと」で，ブラジャーは「しんどい」のでしない等，他者の目に映る外見よりも，身体の快適さに重きを置く「おっさん化」が進むという対照的な反応がみられた。前者の「いつまでも若く美しく輝きたい（L)」という言葉の背景には，女性の外見の美しさ・若々しさに付与される社会的価値観，すなわち,「若さ＝美＝魅力的」の影響が考えられる。だが,「いつまでも美しい自分」という自己像に固執すると，身体の変化によって自尊心が低下したり，幻の自己像を破壊されることに過剰な恐怖を感じたりするという，強迫的なあり方につながる可能性が示唆される。一方，後者の「おっさん化」が進むという言葉は，夫と死別した後，独居生活を送る女性達によって語られた。家の中に共に暮らす異性がいるかいないかということは，たとえその存在が空気のように感じられても，女性が自らを女性と意識するこころの在り様に影響を与えると思われる。この点については以下にも考察する。

第三に,「男性の存在を感知」した人について述べる。男性から胸のふくらみに注目される体験後，その注目に応える形で女性もまた，自らの身体に意識を向け直し，服装や仕草に至るまで変化がみられた。「こんなお婆さんに（T)」という語りからは,「まだ自分は異性から求められる対象になり得る」ことへの驚きがうかがえた。同年代の男性から性愛のまなざしを向けられることは，女性自身の性愛を喚起する体験であり，老年期においても，女性が男性を感知する時，女性は自らのセクシュアリティをいきいきと体感するといえるだろう。生きるエネルギーとしてのエロスは，老年期においても枯れることはないのである。しかし，女性が男性との関係に求めるものは，直接的な肉体接触によるつながりだけではなく，むしろ，心のこもった会話や楽しい食事の時間，歩調を合わせて歩いてくれる気遣いといった，日常生活に浸透する類の親密さに中心がおかれていた。男女をつなぐものは，性的な魅力だけではなく，互いを大切に思っているという信頼や，優しさと言えるだろう。その心は，人生の酸いも甘いも味わってきた老齢の人間同士，お互いの歴史を思いやり、お互いに欠けている所を補い合いながら生きていきたいという願いであるように思われた。

第四に, 閉経における情緒体験について述べる。まず,「楽になる」と感じた人は, 閉経を「余計なものからの解放」「加齢の良さ」と体験していた。特に，生理痛や生理不順によって心身共に長年悩まされてきた人ほど，女であることの「負の側面」から解放され，すがすがしく感じられていた。また,「男性に頼らずに生きていこうっていう気持ちがすごく出て男っぽく（D)」なったと大きな気持ちの変化を語る人もいた。次に，寂しさを感じた人は「これで女性という性じゃなくて，女だなって。服とか化粧とかはそういう格好するけど，体の内部は女だなって思った（X)」と，産む性としての女性性の喪失を感じるきっかけとして閉経を体験していた。「子どもは一回授かったけど無理だったので。赤ちゃんのことを見たくない時期もあった（R)」と，生殖機能を十全に使うことができなかったという悔いがある人は，とりわけその喪失を惜しむ傾向がみられた。しかし, 時が過ぎるとその生活が楽に思う様になったともいう。それは,

女性性の喪失に対するMourning workを経た後の心境と思われた。一方,「否定」を感じた人は,「閉経するような，そんな私ではない（B)」と閉経を受け容れ難く感じていた。そこには，閉経によって「女はあがり」,「閉経＝老いの宣告」という否定的なイメージにより，閉経が自尊心の低下につながっていることが推察された。

このように，閉経に対する情緒体験は，各人が身体を通した女性性の経験をこれまでいかに体験してきたかということ，特に，性愛や子供を産み育てることについてどの程度充足感を持ち，自己の生き方として納得しているかということと響き合う関係にあると考えられる。

また，閉経が初潮や妊娠・出産と異なる点は，目に見えないということである。つまり，初潮や妊娠・出産は出血や下腹部の膨張，赤ん坊の誕生という形ではっきりと目に見える，いわば否定のしようのない現象である。一方，閉経は毎月の出血の頻度が徐々に間隔が空くようになり，ついには無くなるというゆるやかな現象であり，ある明確な時点で閉経という現象が起きたと特定することは難しい。さらに，前者については周囲からの認知もなされるが，閉経については本人が言葉にしない限り周囲の認知はなされない。こうした特徴もあり，閉経に対する受け止め方には「私が閉経になるはずがない」といった否定や，閉経について「忘れて」しまうといった，初潮や妊娠・出産では起こりにくい認知や体験も起こり得るのであろう。

最後に，女性らしい身体変化は「変化は感じず」「分からない」と回答した群について検討する。この群の人達は閉経について言及するものの,「何も考えない・感じない」と情緒体験は語られなかった。また，若い頃と変わらないことを強調する語りもみられた（ISY)。おそらく，文字通り変化を感じなかった人もいれば,調査者の前で語ることに抵抗を感じて「分からない」とした人もいたと思われる。前者は，閉経や身体変化を顕著に意識する機会がなく,「印象に残っている」体験として語りにくかったことが推測できる。だが，何も無いということは不自然とも言えよう。穿った見方かもしれないが，加齢による女性らしい身体変化は，すなわち，身体における女性らしさの喪失ともいえ，個人の全体を内側から揺さぶるものであるため，対象化し意識化することが出来にくいということや，意識することを忌避しているということも考えられる。つまり，身体の変化という現実から情緒的に距離を置き，若い頃の自分に同一視し続けることにより，自尊心の低下からの防衛をはかろうとする認知的対処が行われているのかもしれない。

最後に，Ⅱ．身体の変化，Ⅲ．閉経，Ⅳ．変化なしの三群において「私はまだ女」とカテゴリー化される語りが見られた。このことは，それまで馴染んで来た己の身体が，その女性らしい特徴を徐々に失っていったとしても，女性であることの意識が無くなることはなく，その現象は女性であることのひとつのプロセスと捉えられていることによると考えられる。

以上，本調査で得られた語りからは，身体における女性らしい特徴の喪失という儘ならぬ現実を必然として見つめ，自分のものとして受け容れていく過程の中で様々な感情が体験されることが見出された。従って，実際には直線的かつ明確に情緒体験を整理することはできず,「諦念」を強く感じる時もあれば,「あがく」時もあるというように，時と場合によってある気持ちが優勢になりながら現実と折り合いをつけていく過程と理解することが妥当であろう。

３．総合考察

本項では，これまでの議論を元に総合考察を行う。第一に，年齢に関する主観的認識を把握するために実施した質問紙調査では，多くの女性が「年よりも若い気持ち」を持ち，「年よりも若く見られた」く思いながら，身体の変化・不全によって老いの現実を感じ取り，認識するという傾向がみられた。従来，女性は，生物学的な身体変化によって女性としての自己を否応なく自覚・変容させられながら齢を重ねると言われているが，老年期もまた，然りであった。身体は他者の目に触れるものであり，同時に「さまざまな事物や他者とのかかわりのベースとなる（鳥江，2009）」ものである。その生涯を通して，女性特有の身体変化をどのように体験するかということは，どのように女性としての自己を生きるかということと密接に関わっているといえるが，老年期はその女性らしい身体特徴を「失う」点が特徴である。その現実をいかに見つめ，何を感じ，考えるのか，ということが，各人のこころの在り様や生き方の変容に大きな影響を及ぼすと思われた。

第二に，女性らしい身体の特質の変化とその情緒体験について，さらに理解を深めることを目的とした面接調査を行った。KJ 法を用いて語りを分析した結果，女性らしい身体変化として，Ⅰ．生殖器疾患，Ⅱ．加齢による身体の変化，Ⅲ．閉経，Ⅳ．変化なし，という 4 つのカテゴリーが得られた。さらに，その情緒体験では，嬉しさや寂しさ，何とも言えない複雑な気持ち等といった様々な感情を体験しながら，自然の摂理として諦念し，それに合わせて身の処し方も変えていこうとする女性もいれば，情緒体験を忌避したり，若い外見を保とうとすることで抵抗を示す女性もいることが示された。

従来「女性のイニシエーションは初潮に始まり閉経で完結する（東山，1990）」と述べられ，閉経以後，つまり，老年期の女性性の議論は空白の分野であり続けてきたが，閉経を体験した自らの身体を女性としていかに意味づけるのか，また，閉経以後の身体変化をどのように心に収めていくのかは，個々の女性としての人生経験を反映して非常に多様であった。さらに，容姿の衰えや歯が抜ける等といった閉経以外の現象についても，女性のこころを内側から揺るがし，体験以前と以後とでは大きな心理的変化が起き得るものであることが示された。また，たとえ閉経を否定し忘却しても，閉経後に身体の変化を重ねて体験することによって，徐々に老いを受け容れていく過程も見受けられた。このように，老年期の女性性の在り様については，女性としての特徴を徐々に失っていく自らの身体をいかにまなざしていくかというテーマを抜きに語ることはできないだろう。したがって，閉経すなわち「完結」と意味付けることは，ややもすれば老年期の女性性の多様性を軽んじることにつながりかねないと考えられる。そして，心理臨床の現場で，身体の変化が語られる時には，女性としての自己の変化を語ることと密接な関わりを持つ体験として重層的に受けとめる必要性があり，言葉にしにくい，或いは，し得ない様々な情緒体験を推し量る視点を持って耳を傾ける必要があると思われる。

第三に，浜田（2012）も述べるように，これまで，高齢者が性的な存在とみなされることは決して多くなかった。しかし，既に生殖機能を終えていたとしても，生殖器疾患が女性性の喪失・傷つきとして体験され得ることが示された。また、女性が男性を感知する時，女性は自らのセクシュアリティをいきいきと体感することも明らかになった。そして，女性が男性との関係に求めるものは，男性のように直接的な肉体の接触というよりも，むしろ，情緒的なつなが

りに重心が置かれていた。この結果から，老年期における性的な感情や性愛はないとするのではなく，一人ひとりが生き生きとした感情と欲望を備えた性的存在であることや，その喚起のされ方や表出のされ方に老年期の女性特有の間接性が見られる点を踏まえることが重要と思われる。性や性愛についての捉え方・感じ方は，自明に与えられた自らの性を他者との関わりの中でどのように生きてきたか，その受容と葛藤の変遷にかかわる重要なテーマである。そのため, 心理臨床の現場でそのようなテーマが語られる際には, 各人の生きてきた歴史, すなわち, 老年期に至るまで，各人が大切な他者とどのような関係を結び，その関係によっていかなる恩恵を受け，犠牲を払ったのかということに思いをはせながら耳を傾けることが肝要であろう。そして，老年期という人生の最終ステージで語られることの意味を，真摯に捉える姿勢が望まれる。

最後に，本研究で得られた知見は，高齢者臨床における視点を多角的にするという意味で，意義があると思われる。今後の課題として，老年期に女性が陥りやすい心の病理への理解を含めて，心理的援助の可能性についてさらに検討することがあげられる。

[文献]

江原由美子・長谷川公一・山田昌弘・天木志保美・安川一・伊藤るり（1989）. ジェンダーの社会学−女たち／男たちの世界　新曜社.

浜田恵（2012）. 臨床心理学における「性に対する態度」研究の展望－医学・教育・心理学の性に関する文献レビューによる検討－.九州大学心理学研究, 13,　pp.93-100.

東山弘子（1990）. 青年期女子のイニシエーション　氏原寛・東山弘子・岡田康伸（編）現代青年心理学−男の立場と女の状況　培風館　p.139.

平木典子（2002）. 新女性のためのライフサイクル心理学. （編）岡本祐子・松下美知子　福村出版　pp. 199-200, 202-203.

皆藤 章（2007）. よくわかる心理臨床　ミネルヴァ書房

神田道子（1993）. 性差別の変動過程を説明する「折り合い行動」概念　女性学研究会（編）　ジェンダーと性差別　勁草書房　pp.22-41.

川喜田二郎（1967）. 発想法　中央公論社.

岡本祐子（2002）. 新女性のためのライフサイクル心理学. （編）岡本祐子・松下美知子　福村出版　p.179.

瀬戸山聡子（2009）. 女性性に関する研究の動向と展望について―生涯発達的視点の必要性　昭和女子大学女性文化研究所紀要, 36, pp.15-32.

鈴木幹子（2001）. 思春期女子における女性性受容の発達過程　思春期学, 19,（1）, pp.75-82.

武内珠美（2002）. 新女性のためのライフサイクル心理学. （編）岡本祐子・松下美知子　福村出版　p.151.

鳥生知江（2009）. 身体症状と心理療法　京大心理臨床シリーズ 8　身体の病と心理臨床－遺伝子の次元から考える　伊藤良子・大山泰宏・角野善広編　創元社　p.302.

（臨床心理実践学講座　博士後期課程２回生）

（受稿 2014 年 9 月 1 日、受理 2014 年 11 月 20 日）

老年期の女性性に関する一考察

西尾　ゆう子

本研究では老年期の女性性をテーマに，女性としての身体を持つ自己を各人がどのように捉えているのかということについて質問紙調査と半構造化面接により質的に検討した。その結果，多くの女性が実年齢よりも若い気持ちを持ち，「年よりも若く見られた」く思いながら，身体の変化や不全によって老いの現実を感じ，認識する傾向がみられた。また，閉経の捉え方は多様で，加齢の良さとして肯定的に体験する人もいれば，女性性の喪失と感じて自尊心の低下につながる人もみられた。さらに，閉経以後に体験されたその他の身体変化についても，自己の連続性が揺るがされる深い心理的変化を含む体験であることが示された。最後に，既に生殖機能を終えていたとしても，生殖器疾患においては女性性の傷つきが体験されること，また，女性が男性を感知する時，女性は自らのセクシュアリティを体感することが示され，老年期の女性における女性性の在り様が豊かに示された。

Femininity of the Elderly

NISHIO Yuko

This study was performed to explore the femininity of elderly women and address the question of how each woman perceives herself in terms of having a woman's body, using a questionnaire and semi-structured interview. The results indicated that many women tended to feel and recognize the reality of old age because of their physical changes and imperfections, despite thinking that they were younger than their age and regarded by others as such. In addition, how they experienced menopause varied; some women experienced it affirmatively while others perceived a loss of femininity and pride. Furthermore, it was shown that other physical changes could be experienced after menopause, including deep psychological changes from a feeling that their continuity of self was shaken. It was also shown that some women with female genital diseases experienced it as a wound to their womanly nature, even if they had already finished their generative function. Finally, it was indicated that the women felt sexual impulses in response to men. The femininity of elderly women was shown in abundance.

キーワード：老年期、女性性、身体
Keywords: Elderly, Femininity, body